

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

氏名	倉田 真由美 (くらた まゆみ)
学位の種類	博士 (学術)
授与番号	甲 第 692 号
授与年月日	2010 年 9 月 25 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
学位論文の題名	日本における生体肝移植の普及過程 生体肝ドナーが生み出された歴史的背景と問題点
審査委員	(主査) 松原 洋子 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 小泉 義之 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授) 天田 城介 (立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授) 武藤 香織 (東京大学医科学研究所准教授)

< 論文の内容の要旨 >

(和文)

本研究では、日本における生体肝臓部分移植において肝臓を提供するドナーをめぐる諸問題を、生体肝移植医療史のなかで検証することを目的とした。具体的には、日本の生体肝ドナーの産出過程を、生体肝移植をめぐる技術および制度の歴史的検討を通じて明らかにし、それを踏まえて生体肝ドナーが直面する問題を考察した。

わが国の移植医療の歴史を振り返ると、角膜移植が臓器移植ネットワークを構築し、死体からの臓器移植を合法的に行える運用基盤を築いた。このシステムの上に腎移植が展開され、1979 年、死体腎移植が立法化されたことにより国家的な意味での legitimacy が与えられ、副次的に生体腎移植は法規制外となった。以降、生体腎移植はレシピエントの救命を優先する「臨床の倫理」に基づき進められ、移植成績の良かった生体腎移植の実績が積み重ねられていった。こうした経過の上に展開された生体肝移植は、脳死移植が実施できないことを正当性の理由に今日まで継続され、適応拡大の過程で大勢のドナーを産み出した。

レシピエントの救命の一方で身体的・精神的な問題を抱えた生体ドナーを産出する、今日の生体移植を中心とした移植医療がどのように築かれたのか、日本の臓器移植医療全体の歴史を見渡しながら日本における生体肝移植の普及過程を明らかにするととも

に、生体肝移植がどのようなシステムで進められ、普及拡大過程で産出された生体ドナーがどのような問題に直面しているのかを明らかにした。

本研究で得られた生体肝移植の成立過程と普及拡大によって産出されたドナー問題についての知見を踏まえ、本年度から本格的な取り組みが始まった脳死臓器移植とあわせて今後の日本の移植医療のあるべき姿を検討していくことが今後の課題である。

(English)

This study is the survey of living organ transplantation history in Japan. We aim to investigate position of living liver donor.

Blood donation caused the concept of voluntary good deed about donor. Corneal transplantation legitimated we could harvest organs from corpse for transplantation, and developed the net work of organ delivery. As a result, permanent insufficiency of donor was occurred. Kidney transplantation involved in this network. In 1980, Government legitimated cadaveric kidney transplantation. By contraries, living kidney transplantation was defined out of law regulation. Considering the life of patient before everything else, living kidney transplantation was performed based on clinical ethics. In this context, living liver transplantation was started, because, in those days, brain death transplantation could not be performed in Japan. Thereafter, living liver transplantation has extended adaptation, and has rapidly spread. Society has considered it was more important we rescued life of patient under our eyes than exceptional medical service to cut healthy donor's body was performed. Therefore, living donors have various problems.

This study suggested that there is no attribution of living donors. We supposed it is very important future challenge to establish the attribution of living donors, throughout disclosed discussion.

< 論文審査の結果の要旨 >

臓器移植医療は圧倒的なドナー不足をどう克服するかが、最大の課題である。死体や脳死体からの提供が進んでも臓器不足は明らかであり、生体臓器移植に依存せざるを得ない。その点で生体依存率が世界一である日本の肝移植医療、とりわけ生体肝ドナー問題の検討は、国際的見地からも重要である。本論文は、移植医療経験をもつ看護師でもある申請者が、4,000件以上の生体肝移植関連の医学系論文や記事、3,200件以上の新聞報道を精査して書いた最初の本格的な日本生体肝移植通史である。しかも、生体肝ドナー産出過程の歴史的解明という一貫した問題意識のもとに移植医療史が記述されており、口頭試問(2010年7月2日17:00~18:00)では、今後の生体肝ドナー問題を考察する基盤を提供した労作として、審査委員が一致して高く評価した。また、生体肝ドナーの現状についても、申請者による実地調査の経験を踏まえて詳細に論じられており、本論文に説得力を与えるものとして評価された。文献資料の取り扱い方法の記述に改善の余地があるという指摘につい

ては、公聴会（2010年7月19日17:00～18:00）までに適切な対応がなされた。公聴会では、生体肝移植の伏線としての生体腎移植と人工透析普及の関係や、生体肝移植と脳死肝移植の並存に至る経緯について、医療者間のコンフリクトに注目したよりダイナミックな歴史記述が望ましかったとの指摘がなされた。また、臓器売買防止を主眼にした最近の国際的な生体臓器移植規制動向に言及されているものの、グローバルな見地からの日本の肝移植の特性と今後のありかたについて、より踏み込むことが将来の課題として挙げられた。申請者自身からは文献資料では把握しきれない実情を明らかにするために、インタビュー調査などにより補足したいとの意向が表明された。確かに歴史叙述については各論的には議論の余地があるものの、議論の基盤自体を与えた本論文の意義が損なわれるものではない。以上の論文審査と口頭試問、公聴会での結果を踏まえ、本論文が博士の学位に値する論文であると判断した。